

ミケランジェロ・ブオナローティ  
壁面から独立した墓廟の計画案

1524年頃  
赤石墨の上にペンとインク、紙 183×197mm  
カーサ・ブオナローティ

Michelangelo Buonarroti

*Progetto per una tomba isolata*

circa 1524  
penna e inchiostro su matita rossa, mm 183 × 197  
Firenze, Casa Buonarroti, inv. 93 A

この素描は、ミケランジェロの真筆であることは疑われないものの、これが何の計画案であるのかについては、これまでにさまざまな異なる解釈が提示されている。

描かれているのは、いわゆる凱旋門形をした、三つの柱間からなる二層の構造体が、高い台の上に載せられているというものだ。中央の柱間はアーチ形で、その上部の壁面には銘板のような矩形の輪郭が見られる。両脇にはそれぞれ壁龕があり、その上層では曲線の破風がのせられている。フリーハンドのデッサンは、おそらく赤石墨で始められ、そのあとインクとペンで仕上げられた。ただし、高い土台だけはペンのみで描かれているので、この部分はあとで付け加えられたものかもしれない。左下の出っ張りの輪郭を見ると、石棺の側面を描いているようにも見えるため、このことから、サン・ロレンツォ聖堂新聖具室のためにかつて計画されていた独立墓廟ではないかとも解釈されてきた。この新聖具室のための独立墓廟を描いたと考えられる素描は複数残されており、カーサ・ブオナローティ49A (cat. no. 40) もその一つである。

これを新聖具室の独立墓廟の計画案とみなす見解の中では、さらに次のような興味深い仮説も見られる。枢機卿ジュリオ・デ・メディチ〔1478-1534、教皇クレメンス7世、在位1523-1534〕は1520年に、2人の公爵としてヌムール公ジュリアーノ〔1479-1516〕とウルビーノ公ロレンツォ〔1492-1519〕、そして2人のマニフィコ〔偉人〕としてロレンツォ・イル・マニフィコ〔1449-1492〕とジュリアーノ〔1453-1478〕の4人の墓を納める独立墓廟を依頼していた。だが、残された書簡によると、あるとき、凱旋門形の四面から実際にトンネル状に十字の通路を開き、中央に五つめの石棺をおき、そこを自らの墓とするという構想を抱いたという。それに関して、まさに本素描に見られる計画の中から、枢機卿が、この五つの石棺を持つ四面門形式の独立墓廟を着想したのではないかとの仮説が提案された。ただ、それを実際に新聖具室内に置くとなるとスペース上の困難が生じただろうと考えられるし、その話題は1520年12月をもって記録には見られず、

最終的には、現在のような壁面墓廟として完成している。

一方、この素描を新聖具室の墓廟ではないとみる見解も複数ある。その一つは、新聖具室ではなく、それに附属する小室「ラヴァマーニ」〔手洗い場という意味〕のための教皇の墓碑のスタディと考えるもので、そうだとすると、本素描の制作年は、その構想が生まれた1524年夏以降になる。また、ボローニャのバルバツァ家の墓の計画を描いたものではないかという仮説もあり、それに従うと、本素描の制作年は1525年10月頃になる。また、これが左右の側面に2基ずつの石棺がおかれた独立墓廟に見えることから、全体として長方形平面となってしまうことに着目し、それゆえ新聖具室のような正方形の部屋には適さないもので、別のプロジェクトのものともみなす見解もある。 (YS)

参考文献：

Ackerman 1961, pp. 21-32; トルナイ1978-1982, vol. II, pp.10-11, 79 (Tolnay 1975-1980); Argan, Contardi 1990; Elam 2006, pp. 181-184; Ruschi 2007, pp. 75-76.



ミケランジェロ《ウルビーノ公ロレンツォ墓碑》《ヌムール公ジュリアーノ墓碑》1520-1530年 サン・ロレンツォ聖堂新聖具室

